

生活型福祉施設における生活支援機能の研究**—ソーシャルワークとの重なりを含めたケアワークの捉え直し—**

同志社大学大学院博士後期課程 黒田由衣 (007351)

キーワード 生活型福祉施設 ケアワーク ソーシャルワーク

1. 研究目的

少子高齢化が進むなか、生活型福祉施設に入所している高齢者のなかには、家族関係に問題を抱えていたり、認知症を患っていたりと、さまざまな複雑化した問題や社会的ニーズを抱えている利用者も少なくない。そのような利用者に、安定した豊かな生活を保障するためには、ケアワークの専門性のみ頼った支援では不十分である。利用者一人ひとりの生育歴や生活スタイル、家族関係などの社会的背景を踏まえた上での生活支援、つまり、人と環境との接点に働きかけるソーシャルワーク的な支援のあり方が重要となる。自らのケアワーカーとしての実践経験からも、ケアワークの中に多くのソーシャルワーク機能が介在していることを実感した。

しかし、両者の間には一定の緊張関係が存在しており、その緩和のために共通性や連続性よりも、その違いに力点がおかれているのが現状である。それら、固有性や独自性ばかりを主張する議論は、実際の生活の場における利用者支援には積極的意味をなさない。

そこで、本研究では、自らのケアワーク実践の経験から生じた問題意識を背景に、生活型福祉施設におけるケアワークの概念や実践を捉え直すことを目的とする。それにより、ケアワークにおけるソーシャルワーク機能を明らかにし、生活型福祉施設におけるケアワークの意義や役割を再構築できると考える。

2. 研究の視点および方法

生活型福祉施設の実際のケア現場においては、ソーシャルワーカーが相談支援の業務を、ケアワーカーがケアワーク業務を行うと、業務内容が厳密に区別されているわけではない。どの職員も両方の機能を担いつつ、利用者の生活支援のために日々のケアを行っており、ケアワーク実践のなかにも、大いに、利用者の社会性を支えるソーシャルワーク機能が含まれている。

本研究では、生活型福祉施設における生活支援機能について、ケアワーク実践に焦点をあてる。そして、ケアワーク実践におけるソーシャルワーク機能を言語化することで、生活支援における「ケアワーク機能」を捉え直し、ケアワークの意義や役割を再考する。そのために、まずケアワークの概念、独自性や専門性を整理する。さらに、2007年の「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正にいたる過程のなかで示された「求められる介護福祉士像」（介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見）のなかの、介護福祉士に期待される12項目の役割を概観し、介護福祉士にどのような役割が求められているのかを整理する。また、介護福祉士養成の立場より、養成課程において、ソーシャルワークの視点がどのように取り込まれているのかを整理する。その上で、ケアワーク実践におけるソーシャルワーク機能を明らかにする。

3. 倫理的配慮

本研究、個別の事例は取り扱わない。日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守し、引用・参考文献を明記する。

4. 研究結果

ケアワークの概念について、片山（2010）の介護福祉士養成テキストにおける「介護」の定義の整理を通して、介護の捉え方にも、①介護を身体的な援助を中心として、家政を付けくわえてとらえようとしているものと、②身体的援助を中心とした生理的ニーズへの対応ばかりでなく、社会的・文化的生活援助や生活環境の整備に触れたものもとがあることがわかった。さらに、後者に関しては、そこに必要とされている知識・技術として、ソーシャルワーク技術等があげられていた。根本（2000）も、ADLの援助をしながら心理・社会的ニーズにも対応していくところにケアワークの専門性があると述べており、ケアワーク実践におけるソーシャルワークの重要性が示唆されていることがわかる。

また、2007年の「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正にいたる過程のなかで示された「求められる介護福祉士像」の12項目のなかでは、④施設・地域（在宅）を通じた汎用性ある能力、⑤心理的・社会的支援の重視、⑦多職種協働によるチームケア、⑨「個別ケア」の実践、⑩利用者・家族、チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力、⑪関連領域の基本的な理解等、従来ソーシャルワークに求められていた内容も含まれていることがわかった。つまり、ケアワーク実践が身体介護のみで終わるのではなく、チームケアや連携・協働の必要性、施設、地域をも巻き込んだソーシャルワーク機能に通ずる生活支援機能についても、期待されていることがわかった。

5. 考察

近年、増加傾向にある小規模特養、地域密着型特養等では、相談員等としての職員が配置されているところは少なく、ケアワーカーが、ケアワーク実践をしながら、利用者の社会性を支えるためのソーシャルワーク実践も同時に行っていることが多い。故に、ケアワーク実践のなかにソーシャルワーク機能を見出し、その必要性を明らかにしていくことは、生活型福祉施設の生活支援におけるケアワーク実践に大いに貢献できると考える。

今回の研究において、ケアワークの概念的にも、介護福祉士養成の新カリキュラムにおいても、ケアワークの中にソーシャルワーク機能が期待されていることが明らかになった。しかし、片山（2010）が指摘するように、両者の関係において、具体的な日常生活援助としてのアプローチの方法としては未だ整理できていない。さらに、新カリキュラムが提示する「教育に含まれる事項」に具体的な教育方法は提示されているとは言えず、それらをカリキュラムとしてどのように展開していくのかについては、養成教育の現場でも整理できていないのが現状である。

今後は、生活型福祉施設におけるソーシャルワーク機能を含んだケアワーク実践の具体的なアプローチの方法について提示していきたい。そうすることで、ケアワーク実践を通しての、利用者の社会生活の維持や、社会性の拡大をも含む、現場に根ざした社会福祉実践の理論化が可能になると考える。

【参考文献】

- 片山徹（2010）「介護福祉士養成における介護福祉援助技術に関する一考察－ソーシャルワークとケアワークの関係性から－」『社会福祉学研究』5、1-9。
- 中村敏秀（2007）「社会福祉援助技術論の位相－ソーシャルワークとケアワークの関係を巡って－」『田園調布学園大学紀要』1-13。
- 根本博司（2000）「第1章第2節 ケアワークの概念規定」日本介護福祉学会編、『新・介護福祉学とは何か』、ミネルヴァ書房、18-24。